VITALITE インタビュー

絵は画家の生命の表現です

日動画廊副社長 長谷川　智恵子
聞き手:佐多保彦　株式会社東機貿　代表取締役社長

はせがわ・ちえこ
1944年、東京生まれ。64年、聖心女子大学在学中に長谷川徳七氏（現日動画廊社長）と結婚。パリ日動画廊支配人、日動笠間美術館副館長、日本洋画商共同組合理事長。仏政府よりナショナル・ド・メリット・シュヴァリエ勲章などを受賞。著書に『素顔の巨匠たち』『世界美術館めぐりの旅』『美術館へ行こう』『女だから女だてらに』など。

佐多：長谷川さんは、旧ソ連へ幾度も足を運んでいらっしやるそうですね。

長谷川:ええ、40回以上になります。一番始めは1975年、「ピカソ展」の交渉でした。その頃私の回りではソ連に対して好い感情をお持ちでない方が多く、不安もありました。ところが実際に行ってみると、とても気さくな方、素朴な方に出会い、お友達づきあいをさせていただきました。おおらかで強い民族性だと思います。

佐多：ロシアには良い作品があるんですか。

長谷川:エルミタージュ美術館やプーシキン美術館など、印象派をはじめ、ピカソ、マチス、シャガール、レンブラント等、驚くほどの名品ぞろいです。私は日動笠間美術館*で、「ルノワール展」「ゴーギャン展」など、日本の西洋美術との交換展を何度かやりました。国立西洋美術館やブリジストン美術館だけでなく、個人コレクターの方々からもお借りできたのは、画商としての強みです。貸したり借りたりという相互関係ができますから。

ここ10年というもの、日本にも立派な美術館が建ちましたけど、内容がまだまだ追いつかないという状態なんです。それに海外からの美術展も数多く催されましたね。けれども最近ヨーロッパでは、「日本には貸してばかりで、何も借りるものがない」と言われてしまうんですよ。「借りるものがないのなら、寄付させちゃおう」ということで、「貸与の交換条件として、フランスのオルセー美術館にお金を寄付」という記事も読みました。私は、オルセーどころじゃない、日本の国立美術館に寄付してあげなきゃかわいそうじゃないか、と思ったのです。それほど予算的に乏しいのです。海外で、「お金はあるけれど文化はない」ように言われるのは、非常にくやしいですね（笑）。日本はすごく文化的な国だと、私は思ってますから。

佐多:アメリカには、個人コレクターの寄付による美術館がたくさんありますね。

長谷川:お金持ちが自分の稼いだものを国に残してあげようという意識がありますね。国がそれを税制優遇してフォローし、メンテナンスしてやってゆくというかたちです。アメリカは大都市だけでなく、地方の小さな町にも素晴らしい作品があります。これには本当に驚かされますね。

日本は日本画や伝統工芸、それにお相撲とか歌舞伎などの保存には熱心ですが、西洋美術に対してはあまり熱心じゃありません。特に、いま油絵を描いている現存の作家が海外で展示をすることに、文化庁の援助がほとんどないんですね。日本画という特殊な珍しいものを、外国の人が本当には理解できません。でも洋画というものは比較も可能ですし、批評もできます。私は、今を生きているもの、息づいているもの、マーケット・バリューのあるものを、もっと海外に紹介してもいいんじゃないかと思います。昨年より香港のアート・アジアに私共も出品し

VITALITE
インタビュー

ていますが、反応はなかなか好いですよ。これからは日本の方が出て行く時代になっていくと思います。

佐多：香港のチャイナ・クラブには中国現代アートのコレクションがあります。

長谷川：香港はあれほどインターナショナルな街なのに、ちゃんとした美術館がないんです。トランジットな街といいますか、97年の中国返還ということもあって、人々が文化を育てようとしない面があるんでしょうね。けれども先程のアート・アジアには4日間で4万5千人も入っています。関心は高いのです。

佐多：ご主人は国内担当で、長谷川さんは海外担当と、ご本に書かれていますが、海外に出られることが多いと、タフでないとやっていけませんね。

長谷川：1年のうち4カ月位は海外です。私の元気のもとは、よく眠ることなんですよ。飛行機の中では、もうずっと（笑）。そして夜は早く熟睡し、朝早く起きるタイプです。「たいへんでしょう」と言われることもありますが、何事もつらいと思えばつらい。生き方の問題ですから。私は楽天家なんでしょうね。

佐多：いきいきとした方に接して勇気づけられることもありますし、また、絵画をみて元気づけられることもありますね。

長谷川：絵というものは、見る人の感受性によって随分違います。ある絵を見て心が穏やかになるとか、ほっとするとか、逆にいきいきしてくるとか。でも、絵は基本的にその作家の魂を表現したものだと思います。偽物と比較するとよく判るのですが、偽物の絵というものは魂がないのですね。プロですからテクニックは相当なものがあります。しかし勢いがない、力がないということになってくるのです。もうひとつは色です。色はどのように真似しようとしてもやはり不自然さがでてきてしまう。どこまでも、その人固有のものなんですね。

これは偽物の話ではないんだけれど、カミーユ・ピサロという印象派の画家がいまして、お孫さんのクロード・ピサロもやはり画家なんです。自黒の写真で見せていただいたら、構図も主題もそっくりなんですよ。ところがカラー写真で見ましたら、色が全然ちがうんです。

自分の心の中にあって、表現しようと思うものを、どのように絵の中に出すか、それがその作家が世の中に受け入れられ残っていくかのポイントになるんでしょうね。そういう作品をご覧になると、落ち着くとか勇気がわくとか、何か訴えるものがあるのだと思います。

佐多：それに関して思うんですが、美術館に行って鑑賞するということも大事だけれど、自分で買ってみるということが本当に美術をみる目を養うことになるんでしょうね。

長谷川：そのとおりです。やはり買うということは凄く勇気のいることです。見る目が真剣です。それに比べて例えば評論家の先生方は、ある時には非常に奇抜なことをおっしゃいます。人が言わなかったようなことを批評しようということもあるのでしょう。でもコレクターの方というのは自分のお金ですから、一生懸命に見てお買いになるのです。

いま売れる絵は「商業主義に乗ったものだ」などとおっしゃる向きもありますが、でもいま売れるということは、誰かに確実に共感を与えたわけです。そういう意味から、「売れる絵だから芸術性が高くない」とは必ずしも言えないのではないでしょうか。絵に対して好き嫌いというものはあるけれども、多くの人がいい絵だな、という場合はどこか共通性があるものです。いい絵、本当に好きな絵に出会いますと、なにかゾクッとします。絵にはその作家の永遠の生命が込められているのです。

*1972年開館。茨城県笠間市笠間978-4